

## 663 胃食道静脈瘤合併 Vp3 肝細胞癌に対する外科治療の有効性の検討

京都大学医学研究科消化器外科

山本成尚、飯室勇二、粟根雅章、山本雄造、山内清明、猪飼伊和夫、森本泰介、寫原康行、稲本俊、山岡義生  
 Vp3 肝細胞癌における外科治療が胃食道静脈瘤破裂の発生を低下させ予後を改善しうるかを検討した。＜対象＞93年9月から97年8月までに入院した Vp3 29例を対象とした。手術例は23例で、内、食道静脈瘤合併12例 (I群)、非合併11例 (II群) であり、非手術例6例はすべて静脈瘤合併 (III群) であった。＜結果＞生存日数の中央値は、I群、II群、III群各々158日、186日、57日であり、I群においては、1年以上生存が3例、II群においては、2例が4年を超えて生存中である。III群においては、6例中5例が80日以内に死亡した。手術例 (I群+II群) と III群の生存率に有意差が認められた。I群では、静脈瘤破裂による死亡はなく、II群では、1例のみが破裂により死亡した。III群では、静脈瘤破裂死2例、肝不全死2例あり、腫瘍栓自体が死亡に関与したと考えられた。＜結語＞Vp3 症例における外科治療は、門脈腫瘍栓による胃食道静脈瘤破裂の危険性を低下させ、予後の改善を期待しうると考えられた。

## 664 5生存率から高度進行肝癌の治療戦略

九州大学第2外科、第2病理\*

○山下洋市、島田光生、宇都宮徹、祇園智信、田口健一\*  
長谷川博文、相島慎一\*、濱津隆之、杉町圭蔵

【目的】高度進行肝癌にも、長期生存者が存在する。長期生存症例の条件を検討する事により、高度進行肝癌に対する治療戦略を明らかにできるものと考えられる。

【患者・方法】5年以上の観察期間を有する進行肝癌初回耐術切除例 (1985年8月～: StageIII73例, StageIVa36例 : 計109例) を対象とした。(検討1) 進行肝癌5年生存条件を、VIスコアを含む臨床病理学的因子を用いて単変量・多変量解析をした。

(検討2) 絶対非治療切除進行肝癌23症例の中で5年生存を認めた3例につき、その臨床病理学的特徴を検討した。

【結果】(検討1)(1) 宿主因子: Child A, ICG値, ChE値, 肝硬変なし, Tリンパ球CD8/CD4比 (2) 腫瘍因子: VIスコア陰性 (3) その他: 治療切除, 術前治療なし (LPD etc)

(ゴシック体は多変量解析での独立予後因子)

(検討2) 絶対非治療切除進行肝癌5年生存症例3例の特徴は、VIスコア=0, ChildA, ICG<15%であり、MCTやEITによる付加治療が遺残結節に完全に施行できた症例であった。

【まとめ】高度進行肝癌であっても、肝機能良好で腫瘍進展因子陰性であれば、術前治療をせずに積極的な外科手術による治療切除を目指すことが長期生存の条件と考えられる。また、絶対非治療切除症例でも、遺残結節に対して十分な付加治療を施行することで長期生存が期待できる。

## 665 高度進行肝細胞癌(StageIV-A)長期生存例の検討

三重大学第一外科

近藤昭信 山際健太郎 伊佐地秀司 横井 一  
小倉嘉文 野口 孝 川原田嘉文

【目的】癌腫が両葉多発か、大血管侵襲の高度進行肝細胞癌(StageIV-A)でも集学的治療により長期生存を得ることがある。今回これら高度進行肝細胞癌を特に長期生存例を中心に臨床病理学的特徴を検討した。

【対象と方法】1976.9～1998.7に教室で経験した肝細胞癌289例中 StageIV-A 47例(16.3%)を大血管侵襲群15例と両葉多発群32例の2群に分け、背景因子、治療方法及び治療成績、3年以上の長期生存例を検討。

【成績】生存率は大血管侵襲群3年14.7%、5年0%、両葉多発群3年28.5%、5年15.2%。術後予防的動注療法により生存率を有意に延長。StageIV-Aで3年以上の生存を得たものは9例(手術例8例)、5年以上は3例(全例手術例)。大血管侵襲群では最長3年3ヶ月であり、5年以上の生存例3例はすべて両葉多発群。

【結語】高度進行肝細胞癌(StageIV-A)の中で両葉多発群では大血管侵襲群に比べ治療成績は良好。肝機能に応じた肝切除中心の集学的治療により、両葉多発群でも5年以上の生存が3例、大血管侵襲群でも3年以上の生存を2例に得ている。

## 666 高度進行肝細胞癌における長期生存手術症例の検討

佐賀医科大学 一般・消化器外科

阪本雄一郎、北原賢二、森 倫人、神谷尚彦、  
佐藤 建、宮崎耕治

【目的】高度進行肝細胞癌 (stageIVa) の手術症例において、3年以上の長期生存例と3年以内の死亡症例を比較し、再発率、再発時期、腫瘍因子、治療因子などの背景因子の特徴について検討した。また、無再発症例の特徴について検討した。【対象と方法】1985年より1998年までに当科において手術を施行した肝細胞癌132例中、継続し経過観察しえた14例のstageIVa手術症例のうち3年以上の生存が確認された群(A群:4例)と3年以内に死亡した群(D群:5例)を比較、検討した。また3年以内の再発症例8例と3年以上無再発症例4例を比較、検討した。【結果】平均再発時期はA群が術後64.0ヶ月、D群が術後4.6ヶ月で、A群の腫瘍径が小さい傾向にあった。A群中で、im2あるいはvp3を有する症例でも長期生存例を認めているが両者を有する症例は認めなかった。無再発例の特徴として、高分化型、単発症例の傾向があった。【考察】stageIVaの肝細胞癌においても、積極的な系統的肝切除により、長期生存例がえられる可能性が示唆された。